

刊行によせて

“世界常民学”へ——庶民・日常性への注目

渋沢敬三が1921年に設立した「アチックミュージアムソサエティ」、その伝統を引く日本常民文化研究所は2021年に、創立100周年を迎える。「常民」とは、日本民俗学の用語で、民間伝承を保持している人々を一般的に指す。この語を最初に用いた柳田國男は、山棲みの非定住の「山人」に対し、定住し稲作農耕に従事する里人、自作農民の意味で用いた。一方、漁民史料、民具の調査研究に尽力した渋沢敬三は、庶民に語感が近い common people の訳語としてこの語を使った。

2019年度は、従来の事業に加え、「常民」、普通の人々の日常生活に注目するという研究所の原点に立ち戻るとともに、この間、海洋文化と民具研究で成果を上げてきた常民文化研究の国際的な発信が積極的に推進された年だったといえる。新規共同研究として、庶民の日常生活「便所の歴史・民俗に関する総合的研究」、「布の製作と利用に関する総合的研究」が立ち上がり、次年度からは「日常茶飯——日本人は何を食べてきたのか」がスタートする。誰でもが一言できる身近なテーマであり、研究会も通常より多くの参加者があり、活発な討論が行われた。しかし、年度の半ば過ぎから新型コロナ(covid-19)の世界的感染の中で諸活動が制約される事態となり、その終息が見通せない状況は今現在も続く。年度末には、アチック・ミュージアムを同祖とする大阪の国立民族学博物館との学術協定も結ばれた。一方は私学の日本常民文化研究所、他方は世界屈指の人類・民族学博物館として渋沢の構想、国内外の庶民生活の調査研究の場はその性格、規模は相違するものの実現し、次なる展開が期待されることになる。

21世紀の常民文化研究は、それぞれの地域に暮らす住民が、まず自身の「郷土」を知り、国や民族を超え、この地球上に共に暮らす住民として生活レベルで互いに理解し、孤立ではなく共感、連帯する意識を持つことが前提となる。「世界常民」学とは、民俗事象を指す「世界民俗」ではなく、また国籍、市民権に関係する「地球市民」とも違い、それぞれの地域、郷土の文化を担っている実在の人々を指すことになる。今日の国際社会における最大の不幸、紛争や戦争の回避には、遠廻りのようでもお互いの生活文化を知りあうことが最も肝要であり、「世界常民学」の目的はそこにある。「民具」が言葉の壁を乗り越え互いの生活文化を理解する第一級の資料となるように、「日本」から世界への「国際」常民文化研究の展開、発信が本研究所の目指すところ、日本発の次なる100年の目標となるのである。

2020年3月

神奈川大学日本常民文化研究所所長
国際常民文化研究機構運営委員長
佐野 賢治